



Title	「カモシレナイ・ニチガイナイ」に関する一考察
Author(s)	尹, 相実
Citation	国語国文研究, 109, 57(8)-45(20)
Issue Date	1998-05-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94761
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_109_57-45.pdf



「カモシレナイ・ニチガイナイ」 に関する一考察

尹 相 実

要 旨

現代日本語における「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」は、命題に関する話し手の真偽判断成立の蓋然性を明示的に表す形式として一括でき、判断系モダリティにおける下位の一類型を構成すると見なされる。本稿では、この両形式を〈蓋然性表明型〉と名付け、判断系モダリティの下位の一類型として位置づけられることの根拠を示す。なお、両形式が同類型の強い意味の項と弱い意味の項として対立を見せ、諸用法にその対立が反映されることをそれぞれの基本的意味に基づいて記述する。従って、両形式に付きまといわれる〈可能性〉と〈話し手の確信〉は派生的意味と捉える。また、〈確信度〉をさらに〈信じること〉と〈信じる度合い〉に分離して考えると、「カモシレナイ」「ニチガイナイ」の両形式が〈蓋然性〉に関わる点で共通する「ダロウ」と弁別できることを検証する。

1. はじめに

先行の研究における「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」の取扱いは、大ざっぱに見て二つに分かれている。一つは、仁田 (1981、1989)、野田 (1984)、益岡 (1991) 等に見られるように、両者を確かさの度合い、つまり、蓋然性の低い形式と、高い形式として相対的に捉える立場である。もう一つは、大鹿 (1992)、三宅 (1992、1993)、須賀 (1995) 等のように、両形式を切り離して別々の枠で個別的に考える立場である。特に、三宅 (同上) は、「カモシレナイ」を「ニチガイナイ」との〈相対的な蓋然性の低さ〉を表す形式と捉えることに批判的な立場をとり、「カモシレナイ」を〈可能性判断〉形式、「ニチガイナイ」を〈確信的判断〉形式として、認識的モダリティにおいて〈断定〉〈推量〉〈実証的判断〉と並ぶ別々の類型として設定している。

ところで、本稿は細部のところで異なる点があるものの、前者の立場を支持するものである。「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」は、形式の構成の仕方・統語的特徴等で見事にパラレルをなす点を含め、以下で記述する意味用法等を考えると、両者を同類型の中で相対的に捉えた方が、諸現象の統一的な説明を可能にする点でより効率がいいからである。

2. 蓋然性表明型の判断モダリティ

2.1 「カモシレナイ」・「ニチガイナイ」の基本的意味と蓋然性

「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」は、ある命題に関する話し手の真偽判断成立の蓋然性（以下、単に‘蓋然性’とも言う）を示すが、その蓋然性の表明において、「ニチガイナイ」が有標の形、「カモシレナイ」が無標の形として対立する。ここで両形式の基本的意味を次のように規定することにする。

「ニチガイナイ」は、話し手が、ある命題が真である蓋然性を持つことを認め、しかもその蓋然性が高いことを示す。これに対して、「カモシレナイ」は、話し手が、ある命題が真である蓋然性を持つことだけを認め、その蓋然性の度合いの高低については別に関与しないことを示す。

それでは、両形式の基本的意味に深く関わる蓋然性について検討してみよう。ある命題が真であることの確実さは理論的には、0%から100%まで連続的に存する線条体として捉えられるが、その上に、「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」のそれぞれの基本的意味による大まかな位置づけを試みると、次の〈図1〉のように示すことができよう。つまり、確実に真であることを示す100%と確実に偽であることを示す0%を除き、その間の確実さを示す位置に存し、しかも「カモシレナイ」が「ニチガイナイ」より相対的に低い方に存するということである。

〈図1〉

0% < カモシレナイ < ニチガイナイ < 100%

ところで、蓋然性の度合いを正確に計量化すること自体が困難でもあり、現実的にあまり意味のあることでもないように思われるが、両形式の相対的意味用法の有意義な解釈を得るためにもう少し具体的な数値を求めてみよう。例えば、ある命題内容の「彼が行く」ということをめぐっての話し手の判断における蓋然性の高低は、以下のよう捉えることができよう。

- | | | |
|---------------------------|---|-----------------------------|
| (1a) 彼は行く。 | : | (1b) 彼は行かない。 |
| (2a) 彼は行く <u>かもしれない</u> 。 | : | (2b) 彼は行かない <u>かもしれない</u> 。 |
| (3a) 彼は行くに <u>ちがいない</u> 。 | : | (3b) 彼は行かないに <u>ちがいない</u> 。 |

つまり、(1a)の「彼は行く」とその打消しの(1b)の「彼は行かない」が対称的に存在し、その両者につく「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」の組合せを合わせて考えると、それぞれの場合は次の〈表1〉のような分布で捉えられる。

〈表1〉

	偏 差	偏差値 (%)
彼は行く	3	100
彼は行くにちがいない	2	95
彼は行くかもしれない	1	67
	0	50
彼は行かないかもしれない	-1	33
彼は行かないにちがいない	-2	5
彼は行かない	-3	0

この〈表1〉によって、前掲の〈図1〉の「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」が示す蓋然性は正確には次の〈図1〉のように修正することができる。

〈図1〉

50% < カモシレナイ < ニチガイナイ < 100%

ただし、「カモシレナイ」が蓋然性を示す副詞類の中で、特に強い偏差のあるもの一例
 えば、〈万が一の場合は〉〈ひょっとしたら／ひょっとすると〉〈もしかしたら／もしか
 すると〉などーと共起する場合は、そちらの偏差値に引きずられることになると思え
 られる。¹⁾ このことは、蓋然性の度合いの表明に副詞類が決定的役割を果たすことを物
 語っている。²⁾

2.2 「カモシレナイ」が示す蓋然性

前に「カモシレナイ」を、ただ命題 $P(X)$ (以下、「 X 」という内容の命題を「 $P(X)$ 」
 と示す) が真である蓋然性を持つことだけを主張し、その度合いの高低については別
 に関与しない形式と規定したが、そのことは、既述したように「カモシレナイ」が蓋
 然性を表す副詞と共起する時、その副詞に依存して蓋然性を示すことになることから
 確認できる。つまり、「カモシレナイ」の形式自体が蓋然性の高低の表明とは無関係で
 あるからこそ、副詞の示す蓋然性に引きずられることも起こるのであると解釈できる。

もう一つ、「カモシレナイ」の基本的意味を支持してくれるのは、蓋然性を示す副詞
 類との共起関係であるが、そのことは以下で詳述することにする。

「カモシレナイ」は0%寄りの低い蓋然性を示す副詞類と共起する場合も、蓋然性の
 度合いを指定する副詞類を伴わない場合もある。例えば次の例(4)は0%寄りの前者の
 例(偽>真)であり、(5)は50~100%の後者の例(真>偽)である。

- (4) 万が一の場合は、下まで三輪車が落ちて、電車の脱線事故の原因になるかもし
 れない。(夫 131)³⁾

(5) そのうちに、ロボット的人事担当重役が出現するかもしれない。(弁 81)

また、次の例(6)(7)は確実さ 50% (真偽の確率が五分五分) の蓋然性を示すと見られる典型的な例である。

(6) しかし、本人に面会した時によく聞いてくれませんか。うまく説得してください。役に立たないかもしれないが、あるいは立つ^(a)かもしれない。ぼくは川端さんの殺人という^(b)ことを最初から信じていないんです。(虹 149)

(7) 東京の『相棒』というのが盗み出したのか、それとも、たまたま入った空き巣が、値打ちのあるもの^(a)だと思って盗って行ったのかもしれない。(赤 181)

この例の点線部の(a)と(b)がそれぞれ真である蓋然性を五分五分と認めていることを示唆している。つまり、〈あるいは〉〈それとも〉が二者択一の場合を示すマーカーとしてよく使われる副詞であることから察して(a)、(b)の蓋然性をそれぞれ 50% と見なしているのではないと思われる。このように、「カモシレナイ」は文面に現れるか否かに関係なく、常に、ある命題 P (X) の蓋然性と共に、「X」を除外 (否定) する命題 P (非 X) の蓋然性をも含意し、P (X) の蓋然性と P (非 X) の蓋然性は確実さを示す線条体の上でそれぞれ一つの〈可能性〉として把握することができる。

2.3 「ニチガイナイ」が示す蓋然性

「ニチガイナイ」は高い蓋然性を示し、蓋然性の低いことを明示する副詞類、例えば次の(8)~(10)の〈万が一の場合は〉、〈ひょっとしてひょっとすると〉、〈もしかしたら〉等との共起は不可能である。

(8) 万が一の場合は、下まで三輪車が落ちて、電車の脱線事故の原因になるかもしれない／にちがいない。(*) (夫 131) (=4)

(9) まだ決まっていないうだが、ひょっとしてひょっとすると、おれはまたイタリアへ行くかもしれない／にちがいない。(*) (冬 109)

(10) もしかしたら受かるかもしれない／にちがいない。(*) (熱海 53)

このように、「ニチガイナイ」は、ある命題 P (X) の蓋然性が高いことを表明する形式であるために、P (非 X) に対する蓋然性は全然考慮していないと見られる。その点で、P (非 X) の蓋然性の認定を含意する「カモシレナイ」と大きく異なる可以说。そのことは次の操作から確認できる。

(11) 清彦の家から二百メートル程いくと、かなりの急坂に向かう。(中略)

多分あわてて、滝江はハンドルを切るにちがいない。(裁 292)

多分あわてて、滝江はハンドルを切るにちがいないし、あるいはハンドルを切らないにちがいない。(*)

(12) 決心した途端にそれが口をついてしまったのか、それとも、口に出してから心をきめたのかもしれない。(花 160)

のにちがいない。(*)

つまり、(11)のような「P (X) にちがいないし、P (非 X) にちがいない。」または、(12)のような「P (X) (の) か、P (非 X) (の) にちがいない。」は成立しないということである。このことは同じ話し手が、ある命題内容 P (X) と、それと矛盾する命題内

容 P (非 X) を同時に蓋然性の高いことと認めることはあり得ないからである。

2.4 蓋然性の度合いをめぐる

(8)~(10)で見たように、「ニチガイナイ」が蓋然性の低いことを表す副詞類との共起例を欠かすのとは対照的に、「カモシレナイ」は蓋然性の低いことを表す諸副詞類と自由に共起することで、「カモシレナイ」の示す蓋然性が「ニチガイナイ」の示す蓋然性より、相対的に低いことが言える (〈図1〉参照)。しかし、この蓋然性の低さとは、あくまでも「ニチガイナイ」に比べての相対的な低さであって、「カモシレナイ」自体が蓋然性の低いことを表すとは言えない (〈図1〉参照)。⁴⁾ そのことは、次の(13)~(16)のように、〈きつと〉〈おそらく〉〈たぶん〉のような、決して低いと言えない、言い換えれば比較的に高い蓋然性を表す副詞⁵⁾と共起する例があることから確認できる。⁶⁾

- (13) 彫りの深い西欧風の顔立ちは、本来ならきつと現代的な魅力をたたえているのかもしれないが、今は一晩の取り調べと留置で憔悴きつた様子だ。(花 20)
- (14) じゃ、きつと、うちのおかあさんはちょっとそのへんで、昔のボーイフレンドに会ってよろめいているかも知れないんだね。(裁 92)
- (15) おそらくあの人からいえば、わたくしはまだまだその資格ができていなかったということになるのかも知れません。(天の 65)
- (16) 私はたぶん、本能的に自分の弱さを感じて、三浦を愛していることをハッキリと言いつけるのかも知れない。(生 49)

しかし、とは言え、このような例が「カモシレナイ」の表明する蓋然性が高いことを示す証拠だとも言えない。かえって、低い蓋然性であれ高い蓋然性であれ、関係なく対応する点で、「カモシレナイ」が別に蓋然性の度合いには関与しないことの証拠になるのではないか。

ただ、(13)(14)のように、「カモシレナイ」が、高い蓋然性を示す副詞の「きつと」との共起が可能であることの解釈として一つの手がかりは、「カモシレナイ」の前後に現れる「ノダ」に求めることができる。つまり、「カモシレナイ」が「ノダ」と複合されることによって、本来なら高い蓋然性を専用的に表す「ニチガイナイ」とよく共起する〈きつと〉を含める〈おそらく〉〈たぶん〉等との共起が可能になるのであろう。(13)を持って説明すると、(13)(14)のように、〈きつと〉が「ノダ」にかかり、「カモシレナイ」を直接的に制限する副詞としては働かないと考えられるのではないか。そう考えると、高い蓋然性表明形式の「ニチガイナイ」との対立関係にある「カモシレナイ」の説明としても矛盾はないのであろう。

- (13) [きつと~たたえているの (だ)] かも知れないが、
- (14) [きつと [うちの~いるかも知れない] んだ]

また、次の例(17)(18)からも、「カモシレナイ」が低い蓋然性にも高い蓋然性にも対応することの証拠が得られる。

- (17) ひょっとすると、隆一と町子は異母兄妹かも知れない……いや、年代的にはその可能性が強いのではないか。(終 91)

つまり、低い蓋然性を表す副詞の〈ひょっとすると〉を同伴することの他にも、「いや、～その可能性が強い」という否定によって、前の「隆一と町子は異母兄妹（だ）」という蓋然性（可能性）は低いということが示されていると言えよう。また、次の(18)は(17)とは逆の例である。

(18) でも、この話をあなたにしようと考えたとたん、嘘かもしれない、あなたならきっと一言の許に嘘だと断定するだろうって思った。（お 102）

の例は「カモシレナイ」の後にさらに換言の形で「カモシレナイ」が受ける命題内容の「嘘（だ）」を繰り返しているが、〈きっと〉のような高い蓋然性を示す副詞と、断定の意味を表す言い切り形の〈嘘だ〉、さらに〈断定する〉という言葉の語彙の意味等から、前の「カモシレナイ」が受ける「嘘だ」という命題が蓋然性の高いこととして示されていることがわかる。

この(17)(18)の用法から間接的ではあるが、「カモシレナイ」の形式自体はただ蓋然性の存在だけを主張し、そのため、場合によっては高い蓋然性にも低い蓋然性にも対応できるということの説明もつく。

以上、蓋然性表明をかけて、「ニチガイナイ」と「カモシレナイ」が強い意味の項と弱い意味の項として対立し、蓋然性の高いことを表す場合は「ニチガイナイ」が担当し、別に高いとか低いとかの度合いには関わらず、ただ蓋然性のあることだけを示す場合は「カモシレナイ」が担当して、原則的には両者が相補的に蓋然性表明の機能を分担していることが指摘できる。

3. 〈可能性〉と〈話し手の確信〉をめぐる

既に言及したように、本稿は「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」を別々の類型として個別的に扱うことに反対する立場に立ち、両者の示す〈可能性〉と〈話し手の確信〉を、それぞれの基本的意味の〈蓋然性の表明〉によってもたらされる派生的意味と考える。

「カモシレナイ」はある命題 P (X) の真である蓋然性の存在を表明し、P (非 X) の蓋然性をも含意する形式であるため、P (X) と P (非 X) の蓋然性は、場合によってはそれぞれ一つの可能性として現れることができる。次の例(19)はそれを克明に見せてくれる例である。

(19) 私は台所と仕事机とキャンパスのあいだを往き来し、（中略）。結婚をする可能性もあるし、ひょっとすると干魚のようなオールドミスになって野沢印刷所のお抱え図工となるかもしれない。（望 40）

のような例の文脈では「カモシレナイ」の表す〈可能性〉は容易に確認でき、下線部の「可能性もある」と「カモシレナイ」は互いに置き換えられ、文の実質的な意味もほとんど変わらない。

また、「ニチガイナイ」について、三宅（1993、1995）のように、話し手の〈確信的判断〉を表すとか、森山（1995）のように〈不確実で高い確信があること〉を表すとかの主張も提出されているが、このような〈話し手の確信〉も当然話し手によって主

張される高い蓋然性からもたらされる意味特徴であると考えられる。

ところで、ここで寺村（1984）の「ニチガイナイ」の特徴に触れた次のような記述に注目したいと思う。

自分の思案、推量を自分に確かめるような、独白的な使いかたがふつうであるところにある。誰かの問いに答える文では使われない。（p.235～236）

この記述について、三宅（1993）では、会話文に現れる「ニチガイナイ」の用例があることから「独白的」という特徴の解釈をしておしており、

- (20) 「急性アルコール中毒。要するに飲み過ぎです。ま、明日一日は二日酔いで辛いでしょうな」「どうも…」
にちがいありません(*)

- (21) 「明日の近畿地方は、全般的に、くずついた天気になるでしょう」

ちがいありません(*)

のような例の「ダロウ」が「ニチガイナイ」に置き換えられないことを手がかりにして「ニチガイナイ」の特徴を次のように説明している。

聞き手より話し手の方がより多くの（詳しい）情報を有していることが明らかであって、聞き手に求められている情報にある種の責任をもって伝えるような文脈においてニチガイナイは用いることができないと言える。話し手の確信（思いこみ）を述べることは不適切とみなされる文脈であるからである。医師の診断や天気予報などがこの文脈の典型的なものである。（p.40）

ところで、本稿の対象の資料に当たってみた結果、確かに「ニチガイナイ」は主に地の文に出現し、会話文中での出現の頻度は非常に低くて、9例しか見つからなかった。同じ蓋然性表明型の「カモシレナイ」が地の文にも会話文にも自由に出現することとは対照的であることを示すこの現象こそ、「ニチガイナイ」を特徴づける基本的意味と関連づけて説明できよう。その意味で寺村・三宅の両説を吟味、再解釈を試みようと思う。

先ず(20)(21)のような会話文中で「ニチガイナイ」が許容されないことの説明として、三宅説を検討してみると、取り上げられた例の把握としては間違いはないがより根本的な説明に欠けている観がある。なぜ医師の診断や天気予報などの文脈で話し手の確信（思い込み）を述べるのが不適切なのか、聞き手より話し手の方がより多くの情報を有しているからこそ、話し手の確信が述べられるのではないか。また、聞き手に求められている情報にある種の責任をもって伝えるような文脈が「ニチガイナイ」の使用条件の制限にどのように関わるか等明らかになっていない。特定例に限られない、多くの「ニチガイナイ」文の解釈に適用される一貫した原理があるはずで、その点で三宅説は未だ納得の行くところまで至っていないのではないかと思う。

本稿の立場では、「ニチガイナイ」の基本的意味特徴の「蓋然性の表明、しかも高い

蓋然性を表す」ことから説明の原理を求めることにする。高い蓋然性の表明は即ち話し手の高い確信に言い換えられる。「ニチガイナイ」が話し手の高い確信を表すため、その命題に関する判断に聞き手が関与する余地を排除するのである。「ニチガイナイ」が聞き手の判断の関与する余地を排除するため、会話文中に現れても、話し手の一方的な発言のニュアンスを帯びることになる。この一方的な発言のニュアンスが寺村の指摘する「独白的」の実像であろう。しかし、(20)の「明日一日は二日酔いで辛い」と(21)の「くずついた天気になる」ことに対する判断は聞き手も関与できることであり、その聞き手の判断の関与する余地を完全に排除することは不自然である。つまり、(20)は聞き手の体の具合のことであり、(21)もやはり聞き手が置かれる天気のこと、このように聞き手の関与を完全に排除できない場面では「ニチガイナイ」は選択されにくいのだと解釈すると当を得た説明になるのであろう。ついでに言う、次章で述べるように「ダロウ」は特に話し手の高い確信を示す形式ではないことから無理なく選択されるのであろう。⁷⁾ この用法に見られる制限は、結局「ニチガイナイ」が蓋然性表明型の強い意味の項をなすことの決定的な証拠になるであろう。

以上の考察で、「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」が〈可能性〉とか〈話し手の確信〉を表すというのは、両形式の〈蓋然性の表明〉という基本的意味特徴から付随的に発生してくる派生的意味と捉えられることが明らかになったと思う。

4. 「ダロウ」との比較と語用論上の制限

非確言型の中心的存在の「ダロウ」は命題の真偽の蓋然性に関わる点では〈蓋然性表明型〉と共通する点がある。例えば、次の例(22)(23)の「ダロウ」と「カモシレナイ」、または「ダロウ」と「ニチガイナイ」はその意味で互いに置き換えられても実質的な意味はそれほど変わらないように見られる。

(22) ほくはこう考えていた。いまほくがいるのは、どこかの家の玄関。横には靴をしまう戸棚かなんかがある。靴べらもおいてあるだろう。スリッパをしまう、しゃれたいれものがあるかもしれない。(プ 23)

(23) 考えてみると、むずかしいんだ。ピロ王子は自分の城だから、すみずみまでよく知っているにちがいない。すぐさがし出されてしまうだろう。(プ 58)

では、判断系モダリティの別の類型に分かれながら命題の真偽の蓋然性に関わる点で類似性を見せている「ダロウ」と「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」は如何に弁別できるのであろうか。例えば、

(24) あれは本当だろう／かもしれない／にちがいない。

の各形式は全部「あれは本当(だ)」という命題が真である蓋然性を持つと主張している点で共通している。ところが、(24 a)～(24 c)のように、「私はそうは思わない」という、話し手が信じないことを表す語句を接続してみると、「ダロウ」と「ニチガイナイ」は成立せず、「カモシレナイ」だけが成立する。

(24 a) あれは本当だろうが、私はそうは思わない。^(*)

(24 b) あれは本当かもしれないが、私はそうは思わない。

(24 c) あれは本当にちがいないが、私はそうは思わない。(*)

(24 a) と (24 c) が成立しないのは、「ダロウ」⁸⁾と「ニチガイナイ」が話し手自身が作った命題を信じる形式であるからである。つまり、「あれは本当 (だ)」ということ信じ、また同じ話し手がそれを信じないということを表す「私はそうは思わない」がつくことはできないのである。これに対して、「カモシレナイ」は別に話し手が命題を信じることを必要条件とはしない形式であるため、(24 b) は成立するのである。次の(25)のように、命題を信じることを表す場合もあることを合わせて考えると、「カモシレナイ」は話し手が命題を信じようが信じまいが関係ない形式であると言えよう。

(25) 川端は塩尻を殺したのじゃないかもしれない。おれはそう思っている。(虹 158)
「そう」は「川端は塩尻を殺したのじゃない」という命題内容と同価で後続の「思っている」がその命題を信じることを示唆する例である。このように、「カモシレナイ」が、話し手の作った命題を信じることに無関心であることは、「カモシレナイ」が単に蓋然性の存在を表明するだけの形式であることに関係があると考えられる。

もう一つの例を見てみよう。(25)とは逆順の組合せの「～思っている、～かもしれない」の例であるが、事情は全く同様である。

(26) 「オートバイが好きなんですか？」

「自分じゃそう思ってるんだけど、そうでもないのかもしれない。ほくにはまだわからないんだ。」(冬 42)

の例は「(自分じゃ) そう」と話し手が信じていることが示されているが、それと矛盾する「そうでもない」という命題が共起できるということは、「カモシレナイ」が、話し手は別にその命題内容を信じなくてもいい形式であることを反映している。つまり、矛盾する命題を同時に信じることはあり得ないからである。従って(26)は次の(26')のように、話し手自身が作った命題を信じることを表す形式の「ダロウ」と「ニチガイナイ」に置き換えることは不可能である。

(26') 自分じゃそう思ってるんだけど、そうでもないのだらう。(*)

～

そうでもないのにちがいない。(*)

ところで、「ダロウ」と「ニチガイナイ」が話し手自身が作った命題を信じる形式である点では同様であっても、さらに「ニチガイナイ」がその信じる度合いが高いことを表す形式であるのに対して、「ダロウ」は別にその度合いを問題にしない点で分けられると考えられる。⁹⁾ 例えば、

(27) 「砂は休んじゃくれません……モッコも、オート三輪も、夜っぴて動いていますよ。」

「そりゃそうだらう……」それはそうにちがいない。砂は決して休んだりしてくれまい。男はひどくまごついてしまう。(砂 39)

の例で、問題の個所を (27 a) とすると、(27 b) のようには置き換えられ、(27 c)～(27 e) のようには置き換えられない。その理由を考えるために、命題を信じることに関係しない形式には<->、命題を信じることは信じるが別にその度合いに関係しない形式には<0>、命題を信じ、しかもその度合いが高いことを表す形式に<+>をつけて示すことにすると、

(27 a) 「そりゃそうだろう……」それはそうにちがいない。

0 +

(27 b) 「そりゃそうかもしれない……」それはそうだろう。

- 0

(27 c) 「そりゃそうにちがいない……」それはそうだろう。(?)¹⁰⁾

+ 0

(27 d) 「そりゃそうだろう……」それはそうかもしれない。(?)

0 -

(27 e) 「そりゃそうにちがいない……」それはそうかもしれない。(?)

+ -

のように示すことができるが、(27 a) (27 b) の成立が自然であるのに、(27 c) ～(27 e) の組合せが許容されないのはなぜであろうか。その理由は語用論的な要因によるものと考えられる。つまり、(27 a) (27 b) のように、「そりゃ (それは) そうだ」という命題を「信じる (0) / 強く信じる (+)」、「信じることには無関係 (-) / 信じる (0)」ことは言語活動の場面でごく普通に見られる強調的な言い方と言える。しかし、(27 c) のように、ある命題を「強く信じる (+) / 信じる (0)」ことは、矛盾はないが、それほど生産的でない (剰余である) ため選択される可能性は低い。また、(27 d) の「信じる (0) / 信じることには無関係 (-)」、(27 e) の「強く信じる (+) / 信じることには無関係 (-)」は常識的にはありえない矛盾とも言える。要するに、語用論的な立場から見た場合、命題を信じることに対する話し手の心的態度の表明は、「 $- < 0 < +$ 」の方向へ展開されるのが一般的で、「 $+ > 0 > -$ 」のように逆方向へは展開されないのである。このことは、間接的ではあるが、「ダロウ」が「ニチガイナイ」と、命題を信じる点では同じでありながら別にその度合いには無関係であることを示唆してくれるのではないかと思う。

以上、〈確信度〉をさらに〈信じること〉と〈信じる度合い〉に分けて弁別要因にすると、三形式は次の〈表 2〉のように特徴づけることができる。

〈表 2〉

判断モダリティの類型	非確言型	蓋然性表明型	
		カモシレナイ	ニチガイナイ
モダリティ形式	ダロウ		
話し手が命題を信じるか	+	-	+
命題を信じることの度合いに関わるか	-	-	+

5. おわりに

以上、判断系モダリティにおいて〈蓋然性表明型〉という一類型を構成する「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」が相補的に役割の分担をすること、また、同じ類型の

構成員として後者と前者が強い意味の項と弱い意味の項として対立し、その対立がそれぞれの用法に反映されることに焦点を合わせて考察した。その考察で、蓋然性を示す副詞類との共起の可否が一つの手がかりになること、また蓋然性の度合いを相対的に捉えることの有効性が確認できた。

その他に、モダリティ形式の意味用法の検討において語用論的レベルでの配慮を欠かすことができないことについても若干触れた。しかし、これは両形式に限られず、他のモダリティ形式にも見られる現象の一つである点で、判断系モダリティの他類型との関連性等も射程においた総合的な考察が必要であり、今後の課題にしたいと思う。

注

- 1) 例えば、次の例の「万が一の場合は」の生起率は5%以下である。従って、
 ・万が一の場合は彼が行くかもしれない。
 (5%以下 67%)
 のように、「カモシレナイ」が「万が一の場合は」と共起する時の「彼が行く」確率は3.35%以下になり、非常に低い蓋然性を示すことになる。
- 2) 蓋然性表明には、文末形式の「カモシレナイ」「ニチガイナイ」も、副詞類も共に与っているが、後者が蓋然性の度合いを細分して示すもの—〈きっと〉〈必ず〉〈おそらく〉〈たぶん〉〈それとも〉〈もしかしたら〉〈ひょっとしたら〉などを揃えているため、二者対立の前者より優位に立って蓋然性表明の役割を果たすのではないと思われる。
- 3) 用例の出典(題名の略号とページ)を示す。その他から得た例は(他)と示す。
- 4) 従って、厳密には「カモシレナイ」を低い蓋然性を表す形式とする立場とは異なると言えよう。
- 5) 森本(1994, p.64)には蓋然性の度合いを持って、〈きっと〉が高い、〈ひょっとしたら〉が低い、〈おそらく〉〈たぶん〉は中間的副詞に分類されているが、他に〈万が一の場合は〉〈もしかしたら〉〈ひょっとしてひょっとすると〉なども低い副詞類に加えて処理することができよう。
- 6) 対象の資料から各3例ずつ、合わせて9例が採集されたが、全部「カモシレナイ」の前後に「ノダ」が出現し、複合された例であることが特筆される。
- 7) 後述するように「ダロウ」は、ある命題内容を話し手が信じることは信じるが特に高い確信を表す形式とは思われず、森山(1995)などのように、「ダロウ」を高い確信を表す形式と扱うことには賛成できない。
- 8) 「ダロウ」が、話し手自身が作った命題を信じる形式であることについては、尹(1989, p.左24~25)を参照されたい。
- 9) 紙幅の関係上、詳しい論証はできない。しかし、森本(1994, p.64)には、「ダロウ」が〈きっと〉〈おそらく〉〈たぶん〉の他に、〈ひょっとしたら〉とも共起する(可能性が高い)ことが報告されている。また、城田(1991, p.51~53)に、無準拠強確信文形の「ニチガイナイ」に対して「ダロウ」は無準拠弱確信文形と位置

づけられていること、宮崎（1993、p.41～42）に、「ニチガイナイ」と「カモシレナイ」に「+確信度」、「ダロウ」に確信度の強弱が指定されていないという意味の「-確信度」の特徴が与えられていること等は、「ダロウ」が蓋然性及び話し手の確信の度合いには関与しないことを支持する記述と考えていいのであろう。しかし本稿では、「確信度」をさらに「信じること」と「信じる度合い」に分離して、それぞれ形式の弁別特徴の引き出しを試みているが、「カモシレナイ」には〈-〉〈-〉の特徴が認められ（〈表2〉参照）、宮崎（前同）の「カモシレナイ」に与えられている特徴の「+確信度」とはほぼ逆の結果が得られたことを強調しておきたい。既に論証したように、「カモシレナイ」は別に蓋然性の高低にも、命題を信じることにしても無関心であることからすると、氏のいう「カモシレナイ」に与えられる「+確信度」は「+蓋然性、-確信度」と修正されるべきものであることをついでに指摘しておく。

10) (2) は、非文の印の(*)と区別して、その文脈で許容されないことを示す。

用例の出典（題名の五十音順、() 内は題名の略号）

- (赤) 赤川次郎『赤いこうもり傘』角川文庫
- (熱海) つかこうへい『シナリオ 熱海殺人事件』角川文庫
- (生) 三浦綾子『生きること思うこと』新潮文庫
- (お) 瀬戸内晴美『おだやかな部屋』集英社文庫
- (終) 円地文子『終の棲家』集英社文庫
- (裁) 三浦綾子『裁きの家』集英社文庫
- (天の) 中河与一『天の夕顔』旺文社文庫
- (虹) 多岐川恭『虹が消える』徳間文庫
- (花) 夏樹静子『花の証言』角川文庫
- (夫) 曾野綾子『夫婦の情景』新潮文庫
- (冬) 五木寛之『冬のひまわり』新潮文庫
- (ブ) 星新一『ブランコのむこうで』新潮文庫
- (望) 原田康子『望郷』角川文庫

主要参考文献

- 大鹿薫久（1992）「「かもしれない」と「にちがいない」」『ことばとことのは』9 和泉書院
- 城田俊（1991）「語の活用と文の活用一文形変化の提唱一」『国語学』164
- 須賀一好（1995）「「かもしれない」の意味と蓋然性」『山形大学紀要人文科学』13-2
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 仁田義雄（1981）「可能性、蓋然性を表す擬似ムード」『国語と国文学』58-5
- 仁田義雄（1989）「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』

(仁田義雄・益岡隆志編) 所収 くろしお出版

野田尚史 (1984) 「～にちがいない／～かもしれない／～はずだ」『日本語学』3-10

益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版

三宅知宏 (1992) 「認識的モダリティにおける可能性判断について」『待兼山論叢・日本学篇』26

三宅知宏 (1993) 「認識的モダリティにおける確信的判断について」『語文』61

三宅知宏 (1995) 「「推量」について」『国語学』183

宮崎和人 (1993) 「「～ダロウ」の談話機能について」『国語学』175

森本順子 (1994) 『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版

森山卓郎 (1989) 「認識のムードの形式をめぐって」、「内容判断の一貫性の原則」『日本語のモダリティ』所収

森山卓郎 (1995) 「ト思ウ、ハズダ、ニチガイナイ、ダロウ、副詞 ～ ϕ 」『日本語類義表現の文法(上)』(宮島達夫・仁田義雄編) 所収 くろしお出版

尹相実 (1989) 「日本語の非確言的表現における話者の役割—現代語のダロウ・ヨウダ・ラシイ・ソウダの弁別特徴をめぐって—」『国語国文研究』83

(ゆん さんしる・韓国、明知大学校副教授)